

安倍夜郎トークショー

第5回漫画家大会議inまんが王国土佐2日目のステージは、「深夜食堂」の作者、四万十市出身の安倍夜郎先生と、元小学館の編集者で「釣りバカ日誌」ハマちゃんのモデルである黒笹慈幾さんのトークショーで幕開け。海外でも人気が高まっている「深夜食堂」の魅力や、安倍先生のふるさと中村への思いについて対談しました。

黒笹 安倍さんとは、僕が高知に移住してからの付き合いですよ。ときどき仲間と一緒に「昭和歌謡大会」という名のカラオケ付き飲み会を高知市内でやっていて、親しくお付き合いさせていただいています。そういえば近々フランスに行かれると聞いていますか？

安倍 その予定だったんですが、最近のフランスの政情が悪くなっていて、まだ日程は決まってはいません。

黒笹 フランスで「深夜食堂」がブレイクしているらしく、今日はその本を安倍さんに持ってきていただきました。フランス以外の外国でも各国版が展開されていますよね。

安倍 これがフランス語版の第1巻です。現在5巻まで出ています。

(スクリーンに画像)

安倍 こちらは「山本耳かき店」。僕のデビュー作です。ちょっと浮世絵っぽくしています。

黒笹 「山本耳かき店」は、安倍さんのプロデビュー作、小学館新人コミック大賞を取った作品ですね。

安倍 はい。いま、これを映画化しようという話が出て、動いています。

黒笹 おお、それはすごい。こちらは韓国語版ですね。

安倍 いまも高知新聞で再録連載している「生まれたときから下手くそ」をまとめた本です。「深夜食堂」も韓国語版があります。こちらは地元誌の「はたも〜ら」に連載している「なんちゃあない話」の台湾版です。中国本土版もあります。

黒笹 さすがに外国語版になるとデザインが違いますね。全然雰囲気が変わります。文化の違いが出ますね。中身は同じですか？

安倍 はい、中身は同じです(笑)。

黒笹 安倍さん、当初はトークのお相手は私ではなくて(笑)けらえいごさんを希望されていましたね。

安倍 僕は早稲田大学のまんが研究会出身で、1年後輩にけらえいごさんがいます。「せきらら結婚生活」や「あたしんち」というヒットまんがを私よりずっと早く書いていた方です。いちどちゃんと話してみたかったので彼女を希望したのですが。

黒笹 結局、けらえいごさんのスケジュールが合わなくて、私が代役を務めます。けらえいごさんの血液型はAB型、僕もAB型ということで、お許しいただきたい(笑)。

安倍 僕もAB型です。

黒笹 あらら、そうなんですか？出版業界には多いですね。何か共通項があるかもしれない。さて、まずは「深夜食堂」の話をお願いします。毎回、よくまあ10ページものネタを探してくるなあ。それを料理と結びつけてオチまで持っていかなければならないということで、非常に難しい作品かなと思います。

安倍 最初の頃はわりと簡単に描いていましたけれども、300話を超えるとアイデアを考えるのが大変です。思いつくことはぜんぶ描いてしまったので、ひとひねり、ふたひねりしなくてはなりません。深夜食堂の登場人物にはモデルが必要なのですが、僕は300人以上も友達がいなくて、困っています。面白い友だちがいたらお知らせください。

黒笹 夜の街で飲んでいるのも、人間サンプル探しということですね。それから中村高校の同窓会も大きな役割を果たしていますね。

安倍 同窓会に行くといろんな人間模様が見えますから。昔、きれいだった人がなんかちょっと・・・だったり、モテてた人が髪が薄くなっていたり。

黒笹 今日、会場に「春キャベツ」のモデルになった人が来られています。

安倍 幼稚園の時から一緒です。

黒笹 春キャベツを塩こんぶで和えてごま油をたらす。このメニューは自分で考えたんですか？

安倍 いや、飲み屋でたまたま、こうしたらおいしいよと教えてもらいました。

黒笹 作品の数だけ料理があるわけで、編集者ならばそこは見逃さないですよ。深夜食堂にちなんだグルメ本が出ていますよね。

安倍 料理の本ですね。深夜食堂をドラマ化する時に、少しでも本を売ろうという出版社の狙いがあって出しました。

黒笹 深夜食堂は人間ドラマが中心ですが、B級グルメやいろんなネタが入っているので、それもヒットの理由のひとつかなと思います。今日はもう一つの作品「生まれたときから下手くそ」を中心に話を聞いてみたいと思います。誕生の経緯を教えてください。

安倍 僕はデビューしたのが41歳の時でした。漫画家になりたいと思って東京に出ましたが、なかなかならなかった。どうしてならなかったかという、どういうまんがを描いたらいいのかわからなかったから。尾崎放哉という俳人がいまして、「咳をしても一人」「墓の裏に廻る」という句が好きで、

ぼんやり考えている時に、「生まれたときから下手くそ」という句のようなものを思いつきました。考えているうちに、自分もそうだけど父親もそうだったなあと思って、父親との思い出話を描いたのが最初です。27歳の時でした。もちろん漫画家になる前、会社に勤めていた頃です。4年に1話くらいずつ描きためていました。漫画家になってから、その習作を黒笹さんに見せたことがあります。そうしたら黒笹さんから小学館に連載のお話をしていただいたようで、ビッグコミックオリジナルの増刊号で連載がきまりました。

黒笹 僕が高知に移住して、安倍さんが中村でやっていた原画展の会場で初めてお会いしました。そこに「生まれたときから」の習作が展示されていて、ネーム、つまり吹き出しの中のセリフまで手描きでした。これは素晴らしいなあ。もったいないので、何とかたたくさんの人に読んでもらえないかと思いました。僕が小学館に繋いで掲載されたっていうのはちょっと違って、深夜食堂がヒットしている安倍さんの本を出せば売れるだろうと小学館が判断したわけで、僕が助言したからというわけではありません。

この作品には安倍さんの原点が詰まっていて、「なぜそれほどまでに」と感じる安倍さんの中村愛・家族愛に対する回答があります。高知の方たちにしっかりと読んでいただき、自分が生まれた高知がどれだけ素敵なおとこかをわかっていただきたいという思いもありました。その後、高知新聞の方でも、地元の人に読んでもらいたいということで再録して連載になっています。毎月最終土曜日に1面ぜんぶ使って掲載というすのはすごいです。「生まれたときから」を読んでいていつもびびりさせられるのは、生まれて記憶も定かでない時のことを、なぜこんなに鮮明に覚えているのかということ。

安倍 勉強ができたわけではないですが、どうでもいいことをしっかり覚えているのが漫画家なんです。

黒笹 例えば、幼稚園のお友達や先生がフルネームで出てくるし、そのディティールまでしっかり描かれている。記憶の断片の中に入っているんですか？

安倍 そうですね。映像として残っています。

黒笹 まちの様子や当時流れていた歌など、まだ少年なのにくっきりとした記憶があって、すごいなあと思います。漫画家になるから覚えていたわけではなく、漫画家になってから記憶がよみがえってきたということですか？

安倍 村上春樹さんの本を読んでいると、作家というのは自転車の速度くらいの頭の回転がちょうどいいのではないかと書いていました。パツと理解ができるとその時点で結論が出るから、忘れるんです。本にも描いたんですが、小学校の時にいきなりお尻を見せる男の子がいたんです。ずっと「あれは何だったんだろう？」と思っていて、描いて行くうちに「あつ、こういう意味だったのか」とわかった。そういう風な記憶があって、昔のことを覚えているのではないかと思います。

黒笹 その子は転校するんですね。じつはその子なりみんなへのお別れのメッセージだったという謎解きでしたね。いやあ、56歳になっても幼稚園の記憶がある大人って素敵だと思います。僕は全部忘れちゃってる。

安倍 優秀な人は忘れるんですよ。

黒笹 記憶の中からのいろいろ掘り起こし、磨いて作品にしていって作業は、いかにも安倍さんらしいと思います。安倍さんを育てた中村という街の魅力だとも思います。なぜそんなに中村が好きなのか、表現してみてください。

安倍 ほかの所を知らないのです。東京に行って40年ほどになりますが、僕が知っているのは中村と東京の一部で、ほかに選択肢がないです。あと、中村はとても平和なまちだったというのがあるかもしれません。

黒笹 記憶にある中村と今の中村と、比べてどう感じますか？

安倍 どんどん寂れていっています。街中から子どもの声がなくなったし、栄えていたところもシャッターが下りている。寂しい感じがしますね。

黒笹 印象的なのはお父さんのファッションです。パンツだけ履いてほとんど裸、この姿でいるんな所に出没する。これは安倍さんの的にはどう記憶していますか？

安倍 家庭って、自分の家しか知らないものなので、父親というのはパンツ一丁でいるものだと思っていました。どうもほかの家では服を着てるみたいですね。父親は暑がりだったので、家から半径200mくらいはパンツ一丁で動いていました。昭和30〜40年のあの頃は、家の前で花に水遣りするおばさんはだいたいシミーズ姿でしたね。

黒笹 お父さんのパンツはオーダーメイドだったんですか？

安倍 パンツは買ってましたね。四角いやつ。

黒笹 お父さんの仕事着は全部お母さんの手縫いだったんですよ。

安倍 そうですね。土建屋さんだったので、いつもニッカポッカを履いていました。

黒笹 お父さんは、安倍さんが高校3年生の時に亡くなられていて、僕はこの作品はそのお父さんへのオマージュだと感じました。本当はお父さんに読ませたくて描いたのかなとまで思いましたが、

安倍 亡くなった人の記憶が薄れていくのが嫌で、このままだと父親のことも忘れてしまうんじゃないかと思って描きました。

黒笹 先ほど尾崎放哉の話がありました。就職して5年目の風邪を引いて寝込んでいる時に「咳をしても一人」の句を、そこからさらに連想して「生まれたときから下手くそ」という言葉が浮かんできたと。それで描くべきだと思い立ったということですね。

安倍 僕は、19年ほどテレビコマーシャルのディレクターをやっていたんですが、性格的に合わないなあ感じていて、なぜ現場の仕切り等が下手なのかなあと反省し、悔やんでいました。その気持ちがあったのでこのフレーズが浮かんできたんです。

黒笹 とても印象深い言葉です。安倍さんの原点のようなこの作品を、ぜひみなさんに読んでいただきたくてあえて深く掘らせていただきました(笑)。

安倍 昭和38年、1963年に中村で生まれ、1981年まで中村にいました。高知市とは若干違いますが、共通する部分もありますので、気にかかる方は読んでみてください。

黒笹 もう一つ、韓国でミュージカルを見た時のエピソードを。

安倍 はい。「深夜食堂」は韓国でミュージカルになりました。大統領が竹島に上陸したりして日韓関係が緊張していた時なんです、そのミュージカルはすべて日本人の設定で、日本の料理で、原作そのままに上演してくれました。セリフはすべて韓国語なんです、四万十川の青のりが出てくる場面の「シマント」は日本語で、ちょっとジーンとききました。

黒笹 作品は日本でもテレビドラマにもなりましたね。

安倍 ドラマに出てくれたでんでんさんと、たまに中野のモツ焼き屋さんで飲むことがあります。

黒笹 作品が縁で知り合う方もたくさんいるでしょうし、作品が知られば知られるほど、想定外のことが起きるんじゃないかと思いますが。

安倍 僕のまんがを読んでくれる方は、若い人は少ないみたいです。映画もそうで、「あんなに年寄りのお客さんが多い映画の回はなかった」なんて言われています。

黒笹 「深夜食堂」はずいぶん前に国境を越えて海外でも評価され、ミュージカルなど表現も広がってきているわけですが、それはどこに理由があると考えていますか？

安倍 まったくわかりません。新宿の片隅でパツとしない人が酒を飲んで、美人も美男子も出てこない。これが日本でウケるのも不思議なことなんです、韓国、台湾、フランスで売れているというの、誰が読んでいるんだろうと思います。

黒笹 生み出した母親がまったく知らないところで、子どもが成長し、どんどん増えていっている、その気持ちは？

安倍 うれしいです。

黒笹 下世話な話ですが、印税や不労所得はずいぶん入ってきてるでしょ？

安倍 おかげさまで。中村の実家も建て替えることができました。

黒笹 安倍さんの実家は僕もお邪魔したことがあって、そのとき「深夜食堂御殿」と命名させてしてもらいました(笑)。もう借金もないでしょうし、いずれは第2御殿が建ってもおかしくないと思うんですが。

安倍 僕は東京でも借家に住んでいて、そういうものにぜんぜん興味がないんです。

黒笹 稼いだお金を使う方にはあんまり興味がない。そういうところも安倍さんのステキなところだと思いますよ。

安倍 欲しいものがないんです。

黒笹 欲のない人が描いた作品だからこそ、読まれてる。消費や欲望優先の資本主義社会が立ちすくんでいる世界の中で、「あ、そうだったのか」と作品を通じて気づく人たちがいるんだと思います。時間がなくなってきたので、プレゼントの話をしましょう。

このあと、20人限定でサイン会をします。なぜ20人かという、ものすごく丁寧な、素敵なサインをされるので時間がかかるんです。どんなサインか、私が今から「生まれたときから下手くそ」の単行本にサインをいただくので見てください。漫画家安倍夜郎のライブドローイング、今日はナマで見ていただきます。(サインをしている手元がスクリーンに映る)名前まで入れていただいて、今日は役得ですね。ありがとうございます。安倍さん、いつもは盆と正月だけしか帰ってこれないんですが、じつはまた来週も高知に来るんですよ。

安倍 はい。来週高知市内で「笑って歌って「実録」深夜食堂」というイベントをします。「深夜食堂」を描くきっかけになった歌があって、それを高知市のみなさんに聞いていただくという会です。歌うのは上方落語の桂雀三郎(じゃくさぶろう)さんとまんぶくブラザーズで、師匠と僕とで深夜食堂のモデルになったお店についてトークします。トークショー、落語、ライブの3つが楽しめますのでぜひいらしてください。

黒笹 僕は中村でやったときに聞いていますが、グラゲラはらわたがよじれるくらい笑いすぎて、翌日はおなかの皮が筋肉痛になりました。最後に、高知のまんが家志望の人たちに向けてメッセージをお願いします。

安倍 あきらめずにずっと続けることが大事じゃないでしょうか。どんなに頑張っても漫画家になれない人もいますし、責任はとれませんが、続けて描いておかないとなれるものもなれないので。

黒笹 安倍さんがプロデビューしたのは40過ぎてからですので、決して遅くないです。漫画家としてパワーを貯めていたと考えることもできます。志がある人は頑張ってください。漫画家さんは後進に対して優しい人がほとんどで、頼りがいがあります。まわりに漫画家を目指したいという人がいれば、ぜひ励ましてあげてください。安倍さんはその人たちにとっては輝く星。これから元気で活躍いただき、ちよくちよく高知にも帰ってきてください。

安倍 年上の黒笹さんからそう言っていただいでうれしいです。ありがとうございます。

黒笹 安倍さんの漫画家大会議への参加は今回が2回目、ぜひ3回目をとお願いしているところですが、まだ「うん」と言っていたいていないので、みなさんから「また来てや」と声を上げていただきたいです。どうでしょう？

会場 「もう一回来てください！」

安倍 考えておきます。

黒笹 今日はありがとうございました。